大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

「近代家族」としての満州農業移民家族像：「大陸の花嫁」をめぐる言説から(一九九六年度第一回コロキウム)

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2010-07-01
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 古久保, さくら
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004993

「近代家族」としての満州農業移民家族像
―「大陸の花嫁」をめぐる言説から―

古久保　さくら

はじめに

本稿は、満州へ開拓移民の妻として渡航して行った女性たちをめぐる言説を分析しようとするものである。彼女たちは「拓士の妻」「大陸の花嫁」と呼ばれた。

彼女たちについての研究は近年ようやく緒についたばかりと言えるが、鈴木裕子が「大陸の花嫁」政策を、女性の性を大陸進出に利用したものとして「従軍慰安婦」とアナロジーさせながら、彼女たちを犠牲者とみなしている[1]のに対して、その後の研究は、女性達の加害者としての側面が確認されている[2]。また、「大陸の花嫁」と斡旋者の思惑の絡み[3]、彼女達の動機の複雑さ[4]も明らかにされ始めている。

これらの研究においては女性の積極的な「行きたい」という意欲は「あこがれ」というような言葉で表現されてきた。これは男性の満州行きの動機として理解されているものに比して、より抽象度の高い表現である。

満州移民男性の動機については、農村の貧困の中で土地をもちたいという願望が一定の共鳴基盤であったことが自明視されている。これに国家の強い指導とその中での「共同体的諸関係」が利用されたのであり[5]、あるいは「主体的」な国家意識が後押ししたと考えられるのである。すなわち、「満州に王道楽土の別天地をつくるという宣伝に引かれていった側面」への着目である[6]。

それでは、農村女性たちは何を共鳴基盤としていたのであろうか、あるいはどこに「主体」を構成する余地をもっていたのだろうか。それを当時の言説空間の中から探ろうというのが、本稿の主題である。

1．満州農業移民における女性の位置づけ

満州事変以前にも日本から約一千名の対満農業移民の歴史があるという

ものの、この前史は土地獲得の難しさと労働力価値の相対的高さからくる農産物市場における価格競争の敗北により失敗に帰していた。ところが、満州国建国以降、日本人による満州内部における土地所有権獲得が容易になったということを条件としながら、加藤完治に代表される農本主義者による農家の二三男対策としての耕地拡大という目的と、石原莞爾に代表される北進論者の対ソ戦略としての満蒙の重要視に基づく治安維持の必要という意図との産物として、満州への農業開拓移民団の送出が始まるのが、1932年のことであった[7]。この後、毎年農業移民団は送出され、1936年には内地における農村経済更生計画の見直しの中で満州農業移民は特別助成事業として認められ、これにともない、1937年から「二十ケ年百万戸送出計画」が始まる。この段階で移民政策は本格化したと言える。この百万戸送出計画は、これが始まった年に日中戦争が全面化し完全に戦時体制に突入していく中で、計画通り達成することができず、当初の計画では成年を移民の主力と設定していたのが、計画二年度からは「満蒙開拓義勇軍」という形で未成年による移民をすすめざるを得なくなり、その後、戦争が激しくなるにつれ、1940年以降はこの「満蒙開拓義勇軍」が移住の主流となっていく[8]。いわば、満州農業移民という政策は、移民の本格化と移民を不可能にする状況とが同時に展開するという矛盾に溢れた政策であったのである。ちなみに、農業移民の送出人数は、1932年10月から1945年8月までで219,388人という数字が残っている。

試験的農業移民から敗戦まで14年、本格的に始まって以来崩壊するまでの間が8年間というきわめて短い期間しかもたない満州農業移民史であるが、30年代と40年代との移民政策には若干相違があるように思われる。女性移民に限って言えば、40年代は、満蒙開拓義勇軍が独立する中で、花嫁の需要が極めて多くなる時期であり[9]、それゆえにより直接に女性の国家意識を鼓舞するような宣伝がうたれる時期であるといえよう。また、「大陸の花嫁」の必要性に民族の血の保全という考え方が登場する[10]のも、40年代の特徴で、ナチスドイツの断種法を模倣した形で国民優生法が登場する動きと機を一にしていると思われる。

女性を農業移民の妻として送出しなくてはならないという認識は、第一

次の武装農業移民団を送出した翌年には、その主導者によって持たれている。第一次農業移民団において、あまりの治安の悪さ、耕地の未熟さに対して不満が続出する中で、団員達の志気を維持するために、助力者としての女性が必要であると考えられたのである。以下の詩は、農業移民の指導に当たった関東軍の東宮鉄男大尉による「大陸の花嫁」募集の自作の詩である。

新日本の小女（ママ）よ大陸に嫁げ
　ペチカ焚きつつ帰りを待てば
　雪の小道に鈴の音響く
　響く鈴の音近くなる
　扉明ければ毛皮に粉雪
　小雪払えばこぼるる笑顔
　笑顔こぼるる茶はたぎる

これは、家の中で待つ女性を主人公にした詩と理解できる。鈴木裕子は、この詩を「他愛もないもの」[11]としているが、実はこの詩に溢れる家族イメージが「大陸の花嫁」をめぐる言説の一つの特徴を形づけているのである。

ここに描かれる女性は、家の中にある。家の中にあって火を焚いて、夫を待っている。鈴の音と共に夫が帰ってくる。その夫を笑顔で迎え共に茶を楽しむ。この家族イメージはまさに近代史において「近代家族」「家庭」として認識されるものに近しい。

戦前期における家族のあり方についてその「近代性」が再検討され始めてから久しい。従来、明治民法に規定されるような家制度とは、前近代の家族制度を踏襲した性格を強くもっていたとする考え方[12]に対し、1980年代後半以降、家族員間のある種の平等を前提とするような家族像が近代日本において存在したことが明らかにされてきた。たとえば、明治20年代の知識人むけ雑誌に掲載された、夫による妻に対する専制や蓄妻を否定して家族は夫婦の情愛を紐帯とすべきという議論から、新しい家族像が理念として存在していたことが明らかにされた[13]。また、従来儒教的女子教育理念として理解されていた女性に対する「良妻賢母」という規範が、「国民」

を育てる者としての女性の新しい役割に対応する規範であったことが明らかになるにつれ、家族内部における女性の役割規範の変遷から家族の「近代性」をが照射されたのである[14]。また、このような理念を実現する家族として都市サラリーマン家庭が指摘された[15]。これらの議論は、「近代家族」という社会史で登場した理論枠組み[16]を十分に認識しながら、展開された議論だったのである。

「近代家族」論に刺激され、近代日本の農村家族像と「近代」化の連関を再考する議論も生じている。女性の役割は家庭内にあるべきという理念は、近代日本においては尋常小学校レベルから修身を通じて全国民に提供されていた[17]が、この規範は多くの農村女性にとっては、実現不可能なものであった。小商品生産の進展と共に農村の女性はむしろより屋外の労働に従事するようになりがちであったという状況[18]の中で、一方では女性の本来のあり方は「家の内にあり、良い妻賢い母であることだ」と教育されることは明らかに矛盾であった。

実際「良妻賢母」主義をその教育理念としている女子中等教育を受けた女性たちは、国家の教える規範に従うことを選択しがちであった。1920年代以降、農村では都市へ出ていく女性の問題が論じられるようになるのだが、そこでは現実的に存在していた二つの女子流出の形態の内、もっぱら中等教育を受けた女性が、都市の新中間層あるいは職工と結婚して農村に帰ってこないという事態だけを問題視している[19]。もうひとつの流出形態としてあった、低賃金労働力としての若年女子の農村からの流出は、論点として提示されることはない。

高学歴の女性が農村において再生産労働（と生産労働）を担う存在とはならないという矛盾を抱えた農村の家族についてもまた、それゆえ家族の再編を自覚的に行おうとする動きが出てくるのである[20]。その動きの一つは、1925年の産業組合の機関誌『家の光』の発刊にみられる。その創刊時に雑誌名を「和合」にするのか「家の光」にするのかと議論になった[21]というこの雑誌は、想定読者として女性もまた含みもっていた[22]のであり、農村振興のためには家族の問題を刷新する必要性があることを理解していたと考えられる。

この『家の光』は、『主婦之友』とならんで、1930年代における農村女性にとっての最大の情報源であった[23]。この二つの雑誌を中心に、「大陸の花嫁」をめぐる言説を検討すると、「満州ブーム」と言われる1938・39年をピークとして記事の集中がみられる。この点は、「大陸の花嫁」を斡旋することにより直接的に関与していた組織の機関誌、たとえば大日本女子青年団『処女の友』や満州移住協会『拓け満蒙』（のちに『新満州』『開拓』と雑誌名変更）において「大陸の花嫁」の関連記事が、1944年まで頻繁に登場する[24]のとは異なっている。本稿では、一般の農村女性達が最も目にしやすかった情報源として上記の『主婦之友』『家の光』を中心に「大陸の花嫁」をめぐる言説を考察したい。したがって、対象とする分析時期が極端に短くなっていること、そしたまた当時期の「大陸の花嫁」をめぐる言説は、第一次移民村弥栄村と第二次移民村千振村の女性に関してのものがほとんどであり、その意味で、本稿で扱う「大陸の花嫁」は「大陸の花嫁」全般ではないことをお断りしておく。

2. 30年代後半におけるマスメディアにみられる「大陸の花嫁」

まず『主婦之友』を見てみよう。

「北満の広野に嫁ぎて」本多方子（『主婦之友』昭和12年9月号）の記事は、大谷大学学監令嬢による満洲移民村の紹介記事である。本多は、第一次武装移民団の入植村である満州弥栄村の東本願寺の住職の妻として渡満している若い女性である。彼女による満州での暮らしは質素ながらも「ランプの下に過ごす和かな団欒」に恵まれたものとして紹介されている。高学歴の女性が農村に積極的に関わるという物語は、ある意味で農村の振興を願う者にとって悲願であった。たとえば、1920年代の地方改良がすすめられる中で登場する小説『理想の家』[25]の中でも主人公を手助けする恋人の女性は、自らも高学歴にして階層も高い大学教授の令嬢として設定されているのである。

本多が描いた家庭団らんのある家族というイメージは、ほかの「大陸の花嫁」の発言として登場する言説にも見受けられる。

「大陸の花嫁と生活する記」（『主婦之友』昭和14年1月号）では、第二

次開拓移民団の入植村である千振村の若妻の生活が紹介されているが、そこでは　『主婦之友』を毎号見ていることが指摘され、その生活の文化程度の高さが主張される。また、生活の豊かさぶりが、「野良は男衆と満人苦人に委せてあり」自分は「先ず子どものお守り」に務めているという生活紹介によって強調されているのである。

「大陸の花嫁が現地生活を語る座談会」(『主婦之友』昭和14年10月号)は、満州国弥栄村公所においてひらかれた7名の「大陸の花嫁」(当時21－30才）による座談会の紹介記事である。7人は、それぞれに渡満動機や生活ぶりを語っている。渡満動機を語る語り口には、それぞれの意志で来たということが表現されていることが特筆されよう。また、暮らしぶりについては「楽」であり、貯金のできることや借金をする人のほとんどないことが述べられ、自分達の生活パターンとしては育児に従事するものが自分しかいないので「手不足」であるという苦労が述べられているものの、「赤ちゃんと一緒には畠へ出ません。お守りをして洗濯をして、その合間に出るようにしています」というように、育児を主にした生活ぶりが明らかにされている。また、夫婦間の関係性については一人は「だって先生(司会の弥栄東本願寺住職　本多賢純)、喧嘩しても出てゆくところがありませんもの」と述べ、もう一人は「私なんか、主人嫩江訓練所へ出張してますので、二年も別居してますけど」の発言のあと、同村の女性に「却て愛が増しますの！でしょう？」と茶化されている。全体的に夫婦仲のよいことが自明視されているのである。

『主婦之友』における「大陸の花嫁」の紹介記事は、近代家族の典型として満州移民家族像を強調しているといえる。このことは、口絵を通じても明らかである。若桑みどりは、『主婦之友』の口絵を分析しているが[26]、そこで満州農業移民家族が描かれる絵を見てみると、満州農業移民家族像は父と母と子供という核家族形態で常に描かれているのである。たとえば1939年の9月号では「大陸に祈る」という向井潤吉作の口絵がある。これはミレーの「晩鐘」を意識してかかれたものと思われる絵であるが、そこには夫婦だけではなく母親の背に負ぶさった子供の姿が描かれている。1940年4月号の「大陸の若き母」(寺内万治郎作）では、満州で農作業に励

んでいる若い夫婦が、農作業の間に授乳している構図であるが、そこでは授乳する母親の肩ごしに乳児を見つめる父親の姿もまた描かれている。同年10月号には「大陸のみのり」（寺内万治郎作）が掲載されている。この絵では子供は二人になり、収穫作業の一コマとして母親がおぶった乳児に笑いかけながらあやし、それを収穫物を持ちながら兄息子が見上げている。少し離れた畑の中で父親は、三人の家族を見守りながら作業に励んでいるという図である。1941年の4月号にも「開拓村の春」（寺内万治郎作）の絵が掲載されているが、ここでも乳児をおぶった母親が播種する傍らで、兄息子が少し離れた画面奥で馬耕する父親に手を振っている場面が描かれているのである。共通する描き方は、情愛に包まれた母と子供達と、それから父、という図。

これは、同時期の『主婦の友』の口絵に、これ以外のシチュエーションで、男性の姿が家族の一員としてはほとんど見られないのと対象的といえよう。同時期は日中戦争が全面化している中で、口絵にもそれが反映して、戦死した夫に会いに靖国神社にお参りにいく母と息子の図が登場し始める時期である。口絵に描かれている男性は戦傷者と看護婦との構図で描かれることはあっても、家族の一員としてはほとんど描かれていないのである。女性は、子供と共に描かれることは多いが、夫と共には描かれていない。同時期、夫が目に見える形で存在する幸福な理想の家族像を満州の農業移民家族は象徴していたのである。これは一つには、満州農業移民はそれ自体が満州の治安の維持策として機能するという軍事的位置づけから徴兵は原則として免除されるということになっていたため、未だこの時期にあっても男性の姿がそこにあるという状況を反映したものだともおもわれるが、夫の存在が可視化されることによって夫と妻との情愛関係を強調する家族像になっているのである。

もう一つ、当時の農村女性にとって最も身近な活字情報源であった『家の光』における「大陸の花嫁」をめぐる記事を見ておこう。「拓士の若妻より内地の婦人へ」弥栄村　渡辺すみ（『家の光』1939年5月号）においては、農業移民の妻による発言として、満州における暮らしぶりが披露されている。

「私はね、今、こんなこと考えているの、『夫のためのよき妻として、二人の子のためによき母として、より家庭を明朗にして行くには、どうすればよいか。』あまり個人的な考えだと笑われるかもしれないけど、白状しますわ。」「戸外の吹き荒ぶ風をよそに、暖かいペーチカの傍で、二人の子供を相手に、編物や、主人の被服の修理をしたり、少しばかりの家畜の手入れをすることが、冬の私の仕事なのよ。」

ここで農業移民の妻である筆者は、自分の家族のあり方を「家」ではなく「家庭」と呼んでおり、そして自分の主要な仕事は妻役割であり母役割であると規定しているのである。当時期の農村における下層の主婦役割の女性は、生産労働と再生産労働とに過労状態であった[27]。また、中層以上の女性は「嫁」として家の重圧の中にいたのである[28]。農業を業としている夫を持ちながら、自らを農業労働力として以上に妻母役割を担う存在として位置づけ、自らの関心の対象が「家」にも舅姑にもなく、夫と子供にのみあるという農村女性のあり方は、まったく新しい農村家族イメージを示すものであった。

同時期の『家の光』誌上で、結婚にあたって自分たちの希望をきいて欲しい、親まかせの配偶者選択はいやであると述べるような女性達が登場している[29]。このような女性達の主張は、夫と妻との関係性を主軸にした家族の再編を望む姿として理解されるべきものである。満州農業移民家族像は、彼女達の目にはもちろん魅力的に映ったことと思われる。

3. 理想の家族としての満州農村家族像

夫を想い暮らしていくという愛あふれる家庭像の表明は、移民村の学芸雑誌においてもみられる。弥栄村で作られていたという学芸雑誌「北辰」[30]の第2巻第3号（昭和9年3月号）には「新ホーム」という詩が掲載されている。

新ホーム　　岩手　真弓

病癒えたる暫らくぶりに
書いたおとづれ故郷のたより
中味書くのはあたしの役で

表書くのはあなたの役よ
裏は二人の名前をならべ
寄せがきしましょうよ北満たより
出雲大社の結びの神も
顔まけするよな新ホーム
故郷の老いたる両親様に
揃って見せたいむつまじさ
春は来た来た北満全土
花は咲く咲く実は結ぶ
共に歌おうよ花咲く春を
雪の東海荒波越えて
響け皆待つ故郷の家へ
愛のセレナーデ朗らかに

この詩もまた、「出雲大社の結びの神も顔まけするよな」「むつまじ」い夫婦間の情愛に包まれた家庭（ホーム）像を描いているのだが、このように満州農業移民の家族を夫婦愛に包まれた家族として描こうとする動きは、満州農業移民家族像が「近代家族」性をもつものであった証左でありながら、ある意味で近代日本の「近代家族」の主流と若干異なる動きであるともいえよう。

瀬地山角は、日本の近代家族の一つの特徴として、夫婦間の愛情が家族を結び付ける絆としてはそれほど強調されないという点を挙げている[31]。家庭内における女性の重要な役割はむしろ母役割であり、それゆえに1930年代における家庭の健全化が要請されたときにも、母がその基軸になることが要請されたのである[32]。

これに対して満州農業移民の家族をめぐる言説においては夫婦愛が強調されている。このことは、一つには満州農村では核家族形態が強烈に押し進んだ結果[33]、夫婦の情愛の発露の妨害要因としての舅姑がいないゆえに、自由に感情を表現し易くなったのだと考えられる。これは当時の農村女性にとっては極めて魅力的なものとして認識されていた。たとえば、「事変下の結婚の導き方研究会」『家の光』1940年3月号においては、内地農村青

年によい花嫁が得られないという問題を論じているのだが、そこでは内地農村に女性が嫁にこない理由として、花嫁になるべき人材を満州農村がとりあげてしまっていることが一つの理由として論じられている。すなわち、農村更正協会主事の発言によれば、「内地の部落や農家が古い伝統を重んじて、噂がうるさいのに、ここには舅姑さえいない点が、若い娘を引きつけるのじゃないかな。」という認識なのである。

農村にこそ家族の理想があると、農村家族を高く評価しようとした和田伝[34]ですら、真の理想の農村家族は満州にしかないことを吐露している。「哈達河の農婦」（『家庭』1940年10月号～12月号掲載）において、和田は訪満での印象として「ここでは互いに相寄り、いたわり合っている。」「農家の女性の地位は、大陸で初めて正当なものに築かれ、それも自然な情愛のうちにあらたまってゆくのではあるまいかと、私は思ったのであった。」と述べるのである。

夫婦の情愛に包まれた家族が実現できるところとしての満州農村。「大陸の花嫁」をめぐる言説からは、このような満州農業移民家族イメージが浮かんでくるのである。

おわりに

理想の家族として演出された満州農業移民家族像が、言説の磁場のなかで像を形成していたこの時期ではあるが、それが本当に真実であったかどうかは、もちろん別問題である。けれども、この夫婦の情愛を紐帯とするという家族の物語は、この後、40年代に花嫁斡旋が現実的に盛んになり、国家的使命をもつことが未婚の女性たちに要求されるようになった後も、通奏低音として流れていたのではないだろうか[35]。

男性満州移民の動機の中の自分の土地がほしいという願望とうらはらに、女性達を満州へあこがれさせたもの、それは幸せな家族を創りたいという願望であったのではないだろうか。そのしあわせさを保障するものとして夫との情愛関係が強調されたという事実は、花嫁斡旋に熱心な人々から強く望まれ、愛情も何もない男のもとに嫁入りさせられ、敗戦後の悲劇に遭い、また戦後別れた女性の存在[36]を目の当たりにしたとき、余りにも

皮肉である。けれども、植民地支配の尖兵として女性達が動員されたとき、そこに家族の近代化という形での「魅力」が提示されたという事実を、私たちはもう一度考えてみる必要がある。最も私的な分野として思われがちな家族をめぐる言説が、国家的一大プロジェクトへの女性達の関与をひきだしうる可能性として実在していたのである。

[注]

1）鈴木裕子『従軍慰安婦・内鮮結婚』未来社、1992。
2）加納実紀代「『国策移民』の女たち―大日向村を中心に―」女達の現在を問う会編『銃後史ノート復刊2』1981、「満州と女たち」『講座近代日本と植民地5』岩波書店、1993。
3）杉山春『満州女塾』新潮社、1996。
4）陳野守正『「満州」に送られた女たち　大陸の花嫁』梨の木舎、1992、蘭信三『「満州移民」の歴史社会学』行路社、1994、相庭和彦他編『満州「大陸の花嫁」はどうつくられたか』明石書店、1996。
5）森武麿「ファシズム下の農村の女性」東京歴史科学研究会婦人運動史部会編『女と戦争』昭和出版、1991。
6）上條宏之「教育県長野と満蒙開拓」創価学会婦人平和委員会編『永遠の大地もとめて』第三文明社、1986。
7）浅田喬二「満州農業移民政策史」山田昭二編『近代民衆の記録6　満州移民』新人物往来社、1978、同「満州農業移民と農業・土地問題」『講座近代日本と植民地3』岩波書店、1993　参照。
8）白取道博「解題　満蒙開拓青少年義勇軍関係資料第1巻」不二出版、1993参照。
9）満蒙開拓義勇軍は、3ケ年の現地訓練の後、漸次開拓農業移民団に移行していくことを計画にしていたため、彼らが独立後伴侶を必要とするのは必定であった。彼らは少年期に原村を離れているために、地縁血縁からの縁談を期待することがむずかしく、国家的な機関を仲介役として伴侶を見いだす必要は高まったのである。
10）拓務省『女子拓殖指導者提要』1942において「大和民族の純血を保持」するために「大陸の花嫁」の必要が主張される。前掲『満州「大陸の花嫁」はどうつくられたか』p.208。
11）鈴木裕子、前掲書、p.32。
12）その代表的な論調は、川島武宜『日本社会の家族的構成』日本評論社、

1950に代表される。

13) 牟田和恵『戦略としての家族』新曜社、1996。

14) 小山静子『良妻賢母という規範』勁草書房、1991。

15) 西川祐子「住まいの変遷と『家庭』の成立」女性史総合研究会編『日本女性生活史4　近代』東京大学出版会、1990。

16) 落合恵美子『近代家族とフェミニズム』勁草書房、1989　参照。

17) 山村賢明は『日本人と母』東洋館出版、1971において女性に対する母としての規範が初等教育の修身において教えられていることを明らかにしている。

18) 永原和子「民族の転換と女性の役割」『日本女性生活史4　近代』東京大学出版会、1990参照。

19) 冨山一郎「『農村モダニズム』とは何か—むらにとどまるということ—」『第45回関西社会学会大会報告要旨』1994。

20) 拙稿「近代農村家族再考」荒木幹雄編『近代農史論争—経営・社会・女性』文理閣、1996　参照。

21) 鹿野政直『戦前「家」の思想』創文社、1983、p.167。

22) 家の光協会編『家の光の40年』1968　参照

23) ロバート・J・スミス、エラ・ルーリー・ウィスウェル『須恵村の女たち』御茶の水書房、1987　参照。

24) 前掲『満州「大陸の花嫁」はどうつくられたか』pp.274－280『拓け満蒙』の、またpp.316－317の『処女の友』の「大陸の花嫁」関連記事目録を参照。

25) 石田傳吉『理想の家』

26) 若桑みどり『戦争がつくる女性像—第二次世界大戦下の日本女性動員の視角的プロパガンダ』筑摩書房、1995。

27) 丸岡秀子『日本農村婦人問題』高陽書院、1937　参照。

28)「大陸の花嫁」へ行こうとした女性達による聞き書きの中にも、農村の「嫁」としての生きにくさから大陸をめざしたという証言はみられる。陳野守正、前掲書　参照。

29)「結婚についての処女の声を聴く座談会」(『家の光』1933. 3月号)や「男からみた女からみた結婚の不満と要求討論会」(『家の光』1936. 2月号)参照。

30) 弥栄村史刊行委員会『弥栄村史　満州第一次開拓団の記録』1986所収。

31) 瀬地山角『東アジアの家父長制』勁草書房、1996、p.149。

32) 永原和子「女性統合と母性—国家が期待する母親像」脇田晴子編『母性を問う（下)』人文書院、1985　参照。

33) 第5次永安屯移民団の敗戦時家族像を再現すると、全所帯278のうち、三世代所帯は13所帯にすぎず、核家族率は80%近くに及ぶのである。
34) 鹿野政直、前掲書、p.176。
35) 「開墾花嫁の歌」(『新満州』1940年4月号掲載) にも満州は「愛の土地」と歌われるのである。
36) 杉山春、前掲書、参照。